

---

# 三兄妹の昼寝

みもこちと

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

三兄妹の昼寝

### 【Nコード】

N8212S

### 【作者名】

みもこちと

### 【あらすじ】

血がつながってたり、つながってなかったりする三兄妹の、ある昼下がりのおはなし。

## あねのばあい

今日は土曜日。

私と妹は休みで、兄は午前中だけ学校である。

私は宿題をしながら、そろそろ昼ご飯をつくろうと考えて一階に降りた。

台所に入り、エプロンをつける。冷蔵庫の中を見てメニューを決めた。

いくつかの食材を台に並べながら、なんとなくリビングを見て、ぎよっとする。

ソファーに兄が座っていた。

「貴史兄さん！帰ってたなら声くらい」

かけてよ、と続けようとしてとめる。なんだか様子がおかしい。近づいてみると、兄は頭を軽く傾けて目を閉じていた。

「・・・ねてる？」

顔を寄せて見つめてみる。ぴくりとも動かない。ごく小さな寝息だけが響く。

どうやら本気で寝ているらしい。

それなら、と思う存分寝顔を観察する。容姿は女の子達がうつとりするのもし方ないと思うほど整っていて、まつげも長い。男のくせに。

ム力ついて頬をつついてみた。ちよつと緊張したが、起きない。

規則正しい寝息につられてだんだん私まで眠くなってきた。  
視線を下をやる。帰ってすぐに寝てしまったようで学生服のままだ。  
ももまで見て、ふいに思う。

男の人の膝枕ってどんなのだろう。

母や妹にしてもらった膝枕はやわらかくて素晴らしかった。  
眠気に、好奇心が上乘せされる。

はたらいてない頭で長いソファに慎重に乗り上げた。ソファが重み  
で沈み、ぎ、と小さな音が出る。

兄は、起きない。

体を横たえて、兄のものの上にそーっと頭を乗せた。  
かたい。予想はしていたが、本当にかたい。しかも高く、理想の  
枕とはほど遠い。

でも。

人肌特有のあたたかさが制服ごしに伝わって、やけに心地よい。  
かぎなれたにおいが私を落ち着かせる。

昼ご飯作ってない、と頭の隅で思いながら眠りに落ちた。

## いもつとのばあい

おなか为空いて一階へ降りた。

右を見る。

台所にいると思っていたお姉ちゃんがいらない。

左を見る。

リビングのソファにかくれて、お兄ちゃんの頭の先だけが見えた。

「お兄ちゃん、おかえりなさい。お姉ちゃん見なかった？」

言いながらソファの正面にまわり込んで、まさかの光景に目を見開いた。

腕くみしながら座って寝ているお兄ちゃん。そして、そのももの上に頭を乗せて、お姉ちゃんが寝ている。

ひざまくらだ。

なんでこんなことに。

お姉ちゃんをゆすってみるが、むう、と一声だして嫌そうにはられなかった。

ダメだ。完璧に寝入っている。

お姉ちゃんは一度寝るとなかなか起きない。寝起きはいいのに。

お兄ちゃんを起こそうか。いや、そんなことをすれば、お兄ちゃんが驚いて立ち上がったお姉ちゃんを落とす気がする。やめよう。

昼ごはんをつくろうとして寝てしまったのだろうか、お姉ちゃんは

エプロンをつけたままだった。

台所に行く。

用意してあった食材から、昼ごはんの内容が予想できた。なので、代わりに作ってしまおうと、エプロンをつけて包丁を手に持った。

火を消す。昼ごはんの用意はできた。

エプロンを外して、いまだに起きない二人に近づく。

起こすつもりが、二人を見てると、なんだか私も眠くなってきた。

あくびをひとつ。

横たわるお姉ちゃんのももに頭を乗せて、床に座って、私もちよつとだけ寝ようと目をとじた。

## あにのばあい

食べ物の香りにゆるく目が覚めた。

腕組みしたまま寝ていたので両腕が軽くしびれている。

同時に腿の上の妙な重みに気が付いた。

ぼやけた頭のままで下を見る。

正体は千紗都の頭だった。

しばし、思考が止まる。

まだ夢の中かと思つて一、二回まばたきしてみたが、消えない。

それどころか、無意識に足を動かしてしまつていたらしく、千紗都はぐぬ、と可愛くない声を出して、居心地悪げに頭をすりつけてきた。

思わず体が強張る。

なんとか声は出さずにすんだ、が、心の中は恐慌状態だ。  
なぜ千紗都が無防備にも俺の腿を枕にして寝ているのか。

全く理解できない。

思考が混乱していても体は正直で、手が千紗都へと伸びた。

少し茶に近い髪に指を通す。色の割に染めたことのない髪は細くやわらかい。

少し弄んで、そのまま頬へ指を移動させた。

起きたらヤバイ、と思つてはいるのだが止まらない。

幸いにも千紗都が目を覚ます気配はなかった。  
安心しつつ、ふわふわした頬を撫でる。

やわらかなそこに唇を押し付けなくなる気持ちと戦っていると、いきなり千紗都が寒そうに体を震わせた。  
少し驚いたが起きたわけではなさそうで、瞳は閉じられたままである。

寒さから眉をしかめる様子にふと仏心がわいて、頬をあたためるように手で覆った。

すると。

千紗都は、俺の手に頬をすりよせて、ふにやり、と微笑んだ。

頭のどこかで紐が千切れるような音がした。

衝動的に千紗都の頬を両手で包み、顔を寄せる。  
唇を合わそうと顔をかたむけた時、視界の端に黒色が映った。

——黒色？

それが表すことに気づき、思い切り顔を上げて千紗都の体を見る。

妹の風花がそこに、いた。

長い黒髪を散らばらせて千紗都の腿に頭を乗せて眠り込んでいる。  
その存在を今まで認識してなかった自分に啞然とした。  
心の中で風花に謝り倒す。

そして一気に冷えた頭で、ついさっきの自分の行動を思い出し、両手で顔を覆った。

「危ねええ…！」

低く呻くような声が出る。

本当に危なかった。

風花に気付かなければ、まず間違いなく襲っていた。

想像したら血の気が引く。

押し倒したいと日々思っているが、無理やり致したいわけでは、断じてない。

だが今回のように無意識で煽られると、どうにも抑えきれない感情があるだけで…！

ごちゃごちゃと言いついて、ふと気付いた。

問題が何も解決していないことに。

腿の上には変わらず千紗都の頭がある。

しかも、暖を取るためか、ソファから垂れ下がっていたはずの手までもが俺の腿に乗っていた。

俺から触るとまた色々と吹っ飛びそうなので、何もできない。

すぐ下に千紗都、ちょっと離れた所には風花の寝顔がある。

妹二人（ただし片方は義理）がそろって寝ている様子は和む光景だ。自分さえ混ざってなければ。

下手にどちらかを起こすことも出来ず、俺は途方に暮れた。

## おまけ ははのばあい

思っていたより仕事が早く終わった。

るんるん気分で家に帰る。これなら子どもの作った昼ご飯を食べられるかもしれない。

鍵を開け、高いテンションのままに玄関の扉を勢いよく開いた。

「ただいまー！貴史、千紗都、風花ー！お母様が帰ったぞう！」

元気よく言った瞬間、ごちん、と如何にも痛そうな音が聞こえて、一拍おいて「お姉ちゃん大丈夫！？」と風花の叫びが聞こえてきた。

「な、なにになに！？どうしたの！？」

リビングに駆け込むと、変に落ち着いた様子の貴史に出迎えられた。

「お帰り義母さん」

「ただいま！で、何かあったの？」

貴史の後ろでは、ソファの下で千紗都が額をおさえて悶絶していた。風花はおろおろと千紗都の頭を撫でている。

貴史がなぜか何も答えないので、私は手っ取り早く結論づけた。

「あー・・・千紗都が寝ぼけてソファから落ちたのね」

違う！と千紗都から反論が飛んだが放っておく。触れない方がいい気がしたのだ。ただの勘だが。

兄さんが悪い、ふざけんなお前の方が、お兄ちゃんお姉ちゃん落ちついて、などと段々ヒートアップしていくよくわからない口論をBGMに冷めた昼ご飯をつまんだ。おいしい。

家の電話が鳴る。旦那の正史からだ。

「あれ、千花さん？仕事上がったんだね、お疲れ様。僕も早めに上がれそうだから今日は家族で夕食にしようよ」

賛成！じゃあまた後で、と即答して電話を切った。

子ども達の意見は聞かない。

家族の団らんは大切だ。

一人で納得しながら、三兄妹の方を見れば、まだ騒ぎ合っている。

千紗都が貴史にクッションを投げつけた。

だが、あっさり受けとめられて悔しがっている。

風花がなだめるが、貴史が更に千紗都を怒らせるので、ケンカっぱいものはまだ終わりそうにない。

うん。

今日も我が家は平和だ。

## おまけ ははのばあい（後書き）

つたない文ですが、ここまで読んでくださってありがとうございます。

彼ら家族の名前の読み方は以下の通りです。

|   |     |     |
|---|-----|-----|
| 父 | 正史  | まさし |
| 母 | 千花  | ちか  |
| 兄 | 貴史  | たかし |
| 姉 | 千紗都 | ちさと |
| 妹 | 風花  | ふうか |

風花は再婚後に生まれた子なので家族全員と血がつながってます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8212s/>

---

三兄妹の昼寝

2011年4月29日16時14分発行